

アラビア語・ペルシア語による『ラーマーヤナ』文献 (rev.)

17 मई 2012 16:17 榊 和良さんから 坂田呼びかけへのデータ提供

写本カタログの上でも、サンスクリット古典叙事詩『ラーマーヤナ』、『アディアートマラーマーヤナ』、ヒンディー語の『ラーム・チャリット・マーナス』のペルシア語訳はかなり存在する。最近、ジャハーンギール帝の時代のペルシア語韻文訳が2冊刊行された。だが、これらはかつてラクナウから石版本としても出版されたもので、二人の訳者によるラクナウ大学に所蔵される二つの写本に基づくファクシミリ版に相当し、クリティカル・エディションと言えるものではない。

『マハーバーラタ』と同じように『ラーマーヤナ』も、イスラームの人々にとっては歴史書や道徳書、為政者の子弟たちのための鑑文学の一つとして知られていたことは、11世紀初めのアル・ビールーニーの『インド誌』を見ても明らかである。だが、写本としてムガル時代より古いものは残されていない。

写本カタログの上で確認されるもの (概略)

- (1) アブドゥル・カーディル・バダーオーニーによる散文訳 (アクバル時代) ヒジュラ暦 999(1591)年に『マハーバーラタ』の翻訳に優先して4年をかけて完成したとされる。
- (2) ナキーブ・ハーンら宮廷翻訳局での官製翻訳 (アクバル時代)
- (3) 『ラーマとシーターのお話』と題されたムッラー・サアドゥッラー・パーニーパッティエー・マシーフによる韻文訳 (ジャハーンギールの外科医で友人であったムカッラブ・ハーンの養子であったことからジャハーンギールにささげられた) (c.1640-41)
- (4) 『マズナヴィー・エ・ラーマーヤナ』と題されたギルダルダース (カーヤスタ) による韻文訳 (ジャハーンギール時代) (1681)
- (5) 『サンプールナ・ラーマーヤナ』、ゴーパールによる散文訳 (1681)
- (6) 散文縮訳 チャンドラマーン (1686)
- (7) 『アトリエ』 チャンドラマーン・ベール (1875年に石版本が出版)
- (8) 『アマラ・プラカーシャ』 アマラ・シン (1705-6) (1877年にナワル・キショールから石版本が出版)
- (9) 韻文訳、アマーナト・ラーイ 1755
- (10) ラームチャリット・マーナスの散文訳、デーヴィーダース・カーヤスタ (17c.)
- (11) 韻文訳、アーナンダ・ハーン・フシュ
- (12) 『ラーム・ナーマ』 韻文訳、ミシュラ・ラームダース・カービル 1861
- (13) 『美女の欺き』、『アヨーディヤの春』 ムンシー・ジャガン・カシュー・フスヌ 1886
- (14) 『勝利の世界』 ラーマ・アシュヴァメーダの韻文訳、マカン・ラール (1872年に石版本出版)
- (15) 『要約ラーマーヤナ』 バンキー・ラール・ザール、韻文 (1884年に石版本出版)

- (16) 韻文縮訳、ハリ・ヴァッラバ・セートゥ (1902年に石版本出版)
- (17) 『恩恵を与えるという義務』ムンシー・パラメーシュヴァリー・サハーイ、リーラー・チャンドラマール・チャンドラ 1523 詩節 (1893年に石版本出版)
- (18) 『韻文ラーマーヤナ』、マハーデーヴァ・ダルヤーバーディー、159 詩節 (1915年に石版本出版)
- (19) 『ペルシア語ラーマーヤナ』、ムンシー・ハリ・ラール・ルスワー、韻文訳 (1881年に石版本出版)
- (20) 韻文訳、モーハール・シン・グジュランワーラー (1890年にラホールで出版)
- (21) 『ヴァールミーキによる貴高いラーマーヤナの翻訳』、散文、訳者・年代不詳 (1872年に石版本出版)
- (22) 『ペルシア語訳ラーマーヤナ』、ラージェーシュヴァラ・ラオ・バハードゥル・アスガル、散文縮訳 (1924・5年にハイダラーバードで出版)
- (23) 『化身ラーマ』縮約韻文、訳者・年代不詳
- (24) 韻文縮訳、訳者・年代不詳
- (25) 「アディアートマ・ラーマーヤナ」の散文縮訳
- (26) 第六篇、ベナレスのアーナンダガナ 1791年頃
- (27) 訳者・年代不詳
- (28) ラームダースの息子、ランジト・ラーイ訳
- (29) シュリー・ゴーヴィンダの息子ゴーパール訳 173 節、1683年

たとえば(3) のマシーフの詩は典型的なサブケ・ヒンディーのスタイルのペルシア語で書かれ、スーフイー詩の特徴を構造的にも表現的にもよく示している。全体の内容は、最初に神への祈祷の節が3節つづき、ついで預言者への讃美が2節、「実例としての物語」と題された1節、(預言者の) 昇天の夜について、自らの師(ピール)の称讃、皇帝ジャハーンギールへの称賛、ことばについて、インドの国王について、妬み深い者への非難、自分自身の境涯についての節とつづく。そして「ラーマとシーターの物語(ダースターン)」として物語が始まる。

同時代のギルダルダースの韻文と詳細に比較すると興味深い。マシーフでは、髪の毛をつかまれて拉致され、ギルダルダースでは大地ごと運ばれる；結末はマシーフでは大地に消え、ギルダルダースでは天界へ昇っていくと表現され、マシーフは7巻までを含むが、ギルダルダースは6巻までとなっている。シーターの描き方は、マシーフでは、『ライラーとマジヌーン』『ユースフとズライハー』『ホスローとシーリーン』といったロマンス叙事詩の女主人公の特徴をオーバーラップさせて描いている。